

ゆめやを紹介したNHKの番組



NHKが当店を紹介した30分番組があります。Youtubeなどにアップロードしたいのはやまやまですが、著作権がNHKにあるため違法となります。ゆめやは、違法なことはしませんので、ここではテレビ画面撮影の静止画像と解説で御かんべんください。

この番組は、柿本健一ディレクターがNHK甲府局で制作したもので、ナレーションは鹿島綾乃アナウンサーです。

埼玉県、東京都、甲府市、甲斐市に住むブッククラブ会員4家族を取材して、その読み聞かせの様子を描いたものでした。その後、NHK甲府、BS2、NHKワールドなどで、全国、全世界に何度も放映されました。以下、内容は感想と要約です。

ワールドで放映された時には、台湾の同業者、ドイツやフランス、英米の会員などから「見ましたあ！」というメールや電話がかかってきてびっくりしたものです。

小さな絵本屋と4つの家族 NHK甲府・制作



ゆめやは、開業が1980年ですが、はじめから一貫してお客様は県外の方が多く、多いときは発送会員が70%を越えていました。現在でも60%前後が県外客です。

甲府市は人口20万、山梨県全体でも県民人口は80万人・常識的に考えれば40年前でも絵本屋を維持できる人口ではありませんでした。

開業当時の甲府市の15歳以下の子ども数は約2.5万人…幼児は1万人もいません。当然、そのすべてが読み聞かせをする家庭というわけではなく、好きでもわずかしら顧客にはなりませんから、立地地域での顧客数は1~3%を見込むしかありませんでした。



実際、開店準備で借入れに行った銀行からは、「ここでは子どもの本の専門店は無理。持って3年ですよ。」と、お金を貸してくれませんでした。

でも、銀行が「持って3年」と言った期間の10倍以上・40数年を越えて営業を続けています。これも、ひとえに県内外でゆめやを支えてくれたお客様のお陰であると感じています。

2016年…甲府市は全国の県庁所在地で最低の人口19万3000人となってしまいました。つくづく、この町を相手に営業をしなくてよかったと思っています。この街だけを対象にした街の書店になっていたら、銀行が言ったように、きっと3年でおしまいになっていたことでしょう。

いま甲府市で生き残っている書店は全国チェーン店と老舗の書店です。40年前に市内に30店舗以上あった書店はいまや10店舗もありません。老舗書店は教科書販売、図書館納入の利権を持っていますから国が潰れるまでは潰れません。後の店舗営業型書店はすべて矮小化するか消えるかです。

複雑な仕組みのブッククラブが取材された



そこで、なんとかサブカルチャーの勢いに対抗して子どもたちに考える力を持ってもらおうとブッククラブ形式で手渡していこうと決めて始めました。現在、ブッククラブ会員は、北海道から沖縄まで…いえいえ数はそう多くありませんが、ヨーロッパからアジア、遠くは地球の裏側ブラジルからニュージーランドまでいます。クチコミの力がすべてなので、一定の意識層の方で固めることができたのは幸運だと思っています。

もちろん、日本三大ブッククラブ・童話館、メルヘンハウス、クレヨンハ

ウスのような大規模なブッククラブではありませんが、みんなが同じ配本を受けるのではなく、個別にすべて違う配本でやっているのです、お客様とのお付き合いは長くなります。生後10ヶ月から多くは小学校6年までですが、中には高校3年まで会員でいた方もいます。こうなれば、もはや大人もタジタジの本まで読める子が出てきます。



そういう形になってきた春のこと、ブッククラブを取材したいとNHK甲府局のディレクター柿本健一さんが訪ねてきてくださいました。どんなふうに番組を構成し、どんな人間ドラマが描かれるのだろうと思いましたが、さすがプロですね。なんと30分もの長尺番組を作ってくださいました。

さすがにゆめやの物置に置いてある書簡や書類まで調べに調べる緻密な取材。構成が見えてきたとき、おどろくほどうまくまとめられているのがわかりました。クルーの方が県外の会員の方々の取材に遠方まで出向き、ブッククラブ会員である年齢の違う子どものいる4つの家族の様子をまとめてくださいました。というわけで、その電気紙芝居、はじまりはじまりです。

最初のご家族



東京駅から新幹線で北に向かうと埼玉の北部に行田市という田園風景が美しく広がる町が見えてきます。番組の冒頭は、この田園を走る新幹線の絵から始まります。

行田は文字のある鉄剣で有名になった稲荷山古墳群がある街です。最初紹介されたブッククラブ会員のご家族は、ここに住む鈴木さんのご一家でした。

長女の秋穂さん、次女の朝香さん、末っ子の遼ちゃんがいるにぎやかなご家庭・・・NHKの担当クルーのカメラマン・高木さんが、「こんな家族をつくれたらいいな！」と結婚願望をつのらせたご家庭でした。ちなみに高木さん、その後、すぐに夢をかなえて結婚され、ブッククラブに入ってこられましたよ。そのくらい、鈴木さんのご家庭はふつうでありながらすてきなご家族でした。



私は鈴木さんのお宅には伺ったことがないのですが、鈴木さんが逆にゆめやを何度か訪ねてくださいましたからお子さんたちとも知り合

い、子どもたちが成長した今でも交流してます。

さて、インタビューでは、秋帆さんが弟さんのぶんもふくめて十年以上配本された本の山を冊数から内容の一部、読んだ感想まで話し始めました。小さいころの絵本もきちんと頭に残っているんですね。

二番目は東京の田中さん



カメラクルーが次に向かったのは東京都文京区の田中さんご一家です。ここは兄弟二人が会員です。お子さんたちは近くの小学校の生徒さん。田中さんは読み聞かせの魅力に取りつかれたようで、小学校で読み聞かせボランティアをしているそうです。

田中さんが二人のお子さんへの読み聞かせについて語ったあと、場面は駕籠町小学校の教室にカメラが入り、田中さんの読み聞かせに熱心に耳を傾ける児童たちの姿が映し出され、読み聞かせされた後の感想も紹介されました。

こんな形で小さいころの配本と読み聞かせが新しい試みとして実行され、成功しているのを見ると、「なるほど本の効果は捨てたものではな



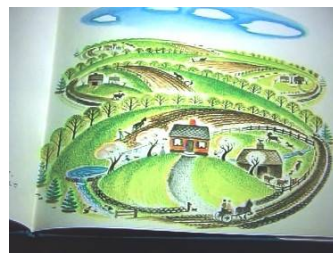
い！」などと感じます。そして、物があふれる(本もあらゆるものが売られている)大都会で田舎の小さな絵本屋を利用してくださる方がたくさんおられることに感謝するばかりです。

4つの家族の合間に



4つの家族の紹介の合間に、ゆめやが、なぜ、このような仕事をしているかについてもついても聞かれ、それも紹介されました。

バートの「ちいさいおうち」を例にとりながら、穏やかで静かな場所で時代をつないでいく。仕事を始めたこと。子どものまっとうな成長のためには、それなりの手助けをしないと、読み聞かせの薦めとその



ために発達に応じた絵本の配本を始めたことなどを話しました。人間関係の分断が始まったのはもう半世紀くらい前からですが、ファミコン(1980年流行)は子どもの世界に大変化を引き起こしました。「だからこそ、読み聞かせと読書でそれに対抗し、人とつながる力をつけてもらいたい」と伝えました。

人、みな楽で便利に向かってます。「このツケがひどい形で現れなければいいな」と思いながら配本を続けています。世の中の流れはデジタルの方向に行き、一体感とか人間関係は着実に希薄になっていくでしょう。みんなが選んだ結果なのでしかたがないですが、昔ながらの方法で親や子、ともだちとむすびつきたいと思う人もいます。そういう方々に「本の内容が伝わっていけば」と思ってます。

三番目は甲府の表さん



三番目の家族は甲府の表(おもて)さんの御家庭にカメラが入りました。共働きなので、カメラは夜でないと動かさせません。24時間稼働のテレビカメラが据え付けられ、寝る時の読み聞かせの様子まで細かに映し出されていました。

お子さんの路佳ちゃんはまだ2歳。



たくさんの本を寝床に運び込み、お父さんとお母さんに読み聞かせをしてもらいながら眠りにつく様子…どこの家庭でもある風景なのでしょうが、こうして映像で見ると、なんともほほえましいものです。読み聞かせていたお母さんが、うつらうつらしてしまうときもお子さんは本を指さし、何か話しています。ほんとうにいい風景です。

最後は…



4番目の家族は甲斐市の林さんのお宅。十か月になったばかりの、まだ赤ちゃんの奏多ちゃんに配達での玄関で初顔合わせ。元気そうな笑顔で迎えてくれました。奏多ちゃんの生活をカメラが追いますが、まだ読み聞かせは好奇心いっぱい、目はあちらに、手はこちらに状態…ここから始まる物語ですね。さて、数年後、数十年後、読み聞かせのどんな効果が子どもたちに出てくるでしょう。



最後に一か月以上にわたって粘り強く取材をしながら、こんな山の中の、おそらくは世界一小さい本屋を地球の裏側にまで紹介していただいたことに、柿本ディレクターほかクルーの方々に心からお礼申し上げます。また協力していただいたご家族の方々にも感謝いたします。時代が時代で、どこまで続けられるかわかりませんが、できるかぎりがんばりたいと思います。

